

大阪学院大学 外国語学部  
教授 吉田 卓

### ウィリアム・スミス・クラークについて

ウィリアム・スミス・クラークという名前を聞いても、すぐに誰のことだと分かる人は少ないだろう。「クラーク博士」と言えば、すぐにあの「少年よ、大志を抱け」のクラーク博士のことかと、多くの日本人には思い浮かぶことだろう。クラーク博士の名前はそれほど有名で日本中に知れ渡っている。北海道大学の構内にあるクラーク博士の胸像の前には、今も記念写真に収まる観光客の姿が絶えない。西郷隆盛の起こした西南戦争があった明治 10 年(1877)に日本を去ったクラーク博士は、今もってその知名度は高いのである。そのクラーク博士が日本に滞在したのは、意外なことに僅か 10 ヶ月余りである。さらに札幌に滞在したのは、そのうちの 8 ヶ月であった。

このように札幌農学校初代教頭クラーク博士は、僅か 8 ヶ月という短期の滞在にも関わらず、他のお雇い外国人に比べて、日本に残した影響はあまりにも大きい。彼の残した「少年よ、大志を抱け」という名言のみならず、彼の精神は日本を代表する国際人ともいべき内村鑑三、新渡戸稲造たちによって受け継がれていった。あまり知られていないが、内村鑑三、新渡戸稲造は札幌農学校では直接、クラークから指導を受けていない。札幌農学校第 2 期生の彼らは、クラークが札幌を去ったのち入学したのである。クラークの札幌滞在がこれほど短期間にも関わらず、なにゆえ彼の札幌滞在が、フロンティア精神と国際性豊かな人物を輩出する要因に成り得たのかを、調査研究するのが本研究の第 1 の目標であった。

第 2 の研究目標としてはクラークが日本に来る前に、ドイツ留学を果たし、そこで約 2 年間の留学生活ののち博士号の学位を得、いわゆるクラーク博士となった。彼の博士論文のタイトルは” The Chemical Composition of Metallic Meteorites” であった。クラークは農業の専門家のように思われているが、彼はもともと学生時代から鉱物の美しさに魅了され、鉱物学に関心があった。学位論文は地球上に落下してきた隕石に関するものである。隕石中の鉱物の化学組成を調べ、その百分率を表にしている。当時、ドイツは学問の先進国であった。クラークが留学先に選んだゲッティンゲン大学には、世界屈指の数学者であり、同時に天文学者でもあったガウス教授が天文台長としていた。クラークは、構内の壮大な石造りの建物とアカデミックな雰囲気満ちた佇まいのなかで研究生活を始められる喜びを故郷へ書き送っている。ドイツで学んだアカデミックな学究生活や大学制度に対する経験や知識は、その後の学長としてのクラークにかなりの部分にわたって強い影響を与えたと思われる。一般に、札幌農学校の設立はクラークによって、アメリカの学校制度一辺倒だと思われている。しかしながら、クラークのドイツ留学体験によって、札幌農学校にはドイツの学校制度の影響も少なからずあるのではないかと私は考えている。ドイツ

文学、ドイツ文化を専攻する私は、この点にオリジナリティーを見出し、これまでにない研究方向、クラークとドイツ留学との関係を中心にした研究を進めている。とくに留学地ゲッティンゲンから故郷アマーストへ送っているクラークの書簡には、ゲッティンゲン大学のアカデミックな雰囲気には圧倒されている文面が散見される。

次いで、北海道という地方の話が、いかにして全国で知れ渡るような話になったのか。いわばローカルの話が全国区に成り得た経緯を調査するのが第3の研究目標であった。現在までの研究成果によると、この第3の研究目標の答えは、国語教科書によるところが大であるという結論に達している。今日のようなテレビ社会にあっては、テレビの存在の大きさは誰も否定できないであろう。たとえば、国を左右する国会議員の選挙では、政策やその候補者の理念よりも、その人の知名度が問われている。これによって当落が決定する。言うまでもなく、テレビによく出演して名前を売っている人がおのずと有利になる。この結果、これまでに考えられなかった芸能人のような人が政界に進出するようになった。だが、テレビがまだ存在していなかった時代は、今日のテレビほどではないにしろ、全国統一の教科書の存在は大きいものがあつた。同世代の人たち同士のなかで、いわゆるアイデンティティーが形成された。これは何年経っても同世代間に共通の思い出として残っている。たとえば太宰治の『走れメロス』とかカール・ブッセの『山のあなた』を中学何年生のときに読んだという具合だ。その影響でカール・ブッセは、ドイツ本国よりも日本の方がよく知られた詩人となっている。国語教科書の果たしてきた役割をこのように考えれば、クラーク博士が国語教科書に採り上げられた時点で、全国的に知れ渡る要因になったことは容易に理解されるだろう。このような理由から、当時の国語教科書にクラーク博士が、どのように紹介されていたのかを調査するのが、第3の研究目標であった。

本年3月でもって3年間継続していただいた研究助成費もいよいよ終了したので、本年度は外部の学会でその成果を発表する予定である。今年の秋に行われる日本比較生活文化学会を発表の場と考えている。この学会の全国大会において、私はこれまでも研究発表をおこなったり、司会をつとめてきている。本年は学会開催の大会実行委員長をつとめるかわら、自らの発表と論文投稿を予定している。